



ふかぶか漂う
第5回

ハッピーバレンタイン

長男がはじめて、いわゆる友チョコではないチョコをもらってきたのは、小学四年生の時でした。放課後、サッカーの練習に向かう通り道で、同じクラスの女の子が待っていてくれたそうです。引っ越して一年も経たない頃のことです。私は相手の子の名前も顔も分かりませんでした。

サッカーの練習から帰ってくるなり、食卓で包みを広げる息子。女子より精神的に幼い四年男子でも、明らかにうかれていました。そしてそのウキウキを家族に悟られまいと装つても、いました。

箱の中に入っていたのは、手作りのトリュフが5つほど。丸めた時の手の跡がくっきり残っているそのトリュフは、四年生の女の子が自分で頑張って作ったことが伝わるもので、非常にほほえましかったです。

チョコがそれほど好きではない長男ですが、無言で一つ口に入れ、味わつてから言いました。

「い」と言い始めること。絶対に手伝うことになるし、台所の片づけだってやらぬに決まっています。

しかし娘には、バレンタインにチョコをあげてみたい、という気持ちはすくでにあるようで、昨年は私にサブライズを用意してくれました。へそくりで買ってきた板チョコ一枚のうち、なんと、五かけらだけ。ひとかけらごとに、「だ・い・す・き★」という字が彫られていました。

そのチョコこそ、指紋がべったり。しかも何を使って字を彫ったのか怪しいシロモノでした。彫刻刀やカッターは持っていないので、鉛筆なんじやないかと推測しています。しかも私にいたかけらよりも、残りの方があずつと多いけれど、それはすでに、一人でこつそり食べたもよう。

つっこみどころ満載の娘の指紋、べったりチョコは、「うれしいでしょ?」といふキラキラした目で正面から監視させていたので、その場でうれしそう

「一個食べいいよ。」
「.....」

「食べいいよ。お母さん、チョコ好きでしょ。」
「.....いや、私が食べたら、

沈黙の間に私の頭に浮かんでいたのは、想像上の女の子の手の平で執拗にこねこね、くるくるされているチョコレート。末っ子が砂場で団子を作った姿と重なってしまった。

既成のチョコを溶かして固め直したものでしょから、それは間違いないチョコの味がすると思います。ただ少しだけひるんでもしまったのですが、すかさず妹と弟が一つずつもらいました。

既成のチョコを溶かして固め直したものでしょから、それは間違いないチョコの味がすると思います。ただ少しだけひるんでもしまったのですが、すかさず妹と弟が一つずつもらいました。

我が家家のバレンタイン

お菓子作りなどしない私が毎年恐れているのは、現在小学三年生の娘が「バレンタインに何か作って配りました。

うにいただきました。

さて、ずばらな私から家族へのバレンタインは、というと、ここ数年はチョコフォンデュです。ブラジルに住んでいた時に、チーズフォンデュとオイルフォンデュとチョコフォンデュが食べ放題というフォンデュづくしの店があつて、胃には重いのですが面白いので度々訪れていました。だから家族にうちは想い出のメニューでもあります。

チョコフォンデュは、キャンドルで温める卓上鍋に、板チョコを碎いて入れて、ホットミルクでのばすだけ。柑橘類を用意すると、ちょっと大人味になつておすすめです。

**文・写真
小宮華寿子**
出版社編集部員
を経て、フリー
ランスの編集者
に。2男1女の母。著書に『ブラジル
の手しごと』(メイツ出版)がある。

**イラスト・
デザイン
寺沼麻美**
切り絵作家、時々
デザイナー。「ゆ
らゆらゆれる北欧風手作りモビール」(ネコ・パブリッシング)を監修。